

鳥学ニュース No. 14

1984年6月5日

半世紀のアホウドリ足環標識

山田信夫

昭和7年4月の始め、私は東京芝浦港より出帆する小笠原への定期船「チーフ丸」(約3,000トン)に乗り込んだ。この目的は、八丈島と小笠原群島との中間に浮ぶ孤島の鳥島で、世界で初めてアホウドリに足環標識を行なうことであった。

東京を出帆して十数時間後、船は鳥島沖に停泊した。鳥島には船がつける港が無い。島の産物であるカツオ節を積んで舂が漕ぎ出し、帰りに食糧(おもに米)を受け取るのだった。この舂に便乗させてもらって、私はようやく島に上陸することができた。

鳥島は本州よりもだいぶ南に位置しているので暖かく、年中青草が育っていた。この草を食ばせて牛(ホルスタイン種)を育成する放場が東京の人によって営まれていた。その事務所に泊めてもらい、世話になることになった。船が小笠原に往って帰ってくるまでの約1週間に、バンディングを行なわねばならなかった。

島に上陸した当日の夕方、事務所の板張り



の部屋に敷かれた布団に体を横たえ、眠りに入ろうとした時、縁の下からも押入れの下の方からも、「クル・クル・クル・クゥート・クゥート」と言った、鳥とも獣ともつかぬ怪しい声が、カサコソと小さいものがうごめくような音とともに聞こえてきた。その原因をつきとめたいと思いつつも、朝からの疲れに、まぶたはすっと落ち、意識は薄れた。

翌朝になって昨夜の物音の原因がはっきりした。それは、縁の下や付近に生えているヘチジョウスキの株かげなどに、無数と言えるほど多く巣穴を掘ってすんでいるオーストンウミツバメだった。暗くなってから島に帰ってきた時のひと騒ぎであった。

バンディングは手早く行なう必要があった。それで、当時島でもっぱらカツオの漁によって生活を営んでいた漁夫のかた10名ほどに協力を依頼した。この純朴な人たちは、快く手伝ってくれた(写真)。

バンディングをするためには、まず、鳥を捕えなくてはならない。これらの人たちと一列横隊をつくり、ザラザラと足もとにくずれる火山灰の斜面を踏みしめながら、ハチジョウススキの株かげに隠れるようにして、鳥群に近づいた。およそ50メートルにも近づいたかと思われる時、鳥群は危険を感じてか、急に斜面を駆けおり始め、飛び立つ態勢に入った。最早一刻の猶予も許されない——私たちは鳥群を押し包むように広く展開して駆け寄りカツオ漁の時に用いる手網をアホウドリに

被せ、1羽ずつ捕えて脚に足環を装着し、すぐに放してやった。

こうして、アホウドリ30羽、クロアシアホウドリ10羽、コアホウドリ10羽に足環をつけた。この作業が終ったのは4月9日の夕方であった。この時、鳥島にはまだ数百羽のアホウドリがいた。しかし、翌年4月に再訪した時、禁猟区指定前の駆け込み捕獲により、数十羽に減ってしまっていた。

その後「絶滅」が伝えられた。幸い、少数が生き残っていることがわかり、最近、少しずつ増えているという。逆に、無数にいたオーストンウミツバメは鳥島から姿を消してしまったとのこと。この半世紀の出来事を振り返ると実に感慨深い。

特集 マーキング法の工夫

他国の事情については詳しくないが、わが国では鳥に足環や頸輪をつけたり、羽色に着色したりするマーキングは、しばしば熱い論争の火種になる。マーキング実行者は、標識をつけることによって野生の鳥の生活が深く理解されるようになると主張する。反対者は、鳥がかわいそうだという素朴な感情論、標識のついた鳥を見てその鳥がすでに誰かの手に触れてしまったことに対するショックとそれに起因する複雑な感情論、標識がつけられると野生の美しさがそこなわれるという審美論、などを表明する。反対論を表明する人は、時として“特権的”研究者に対する不信を暗に述べる。

私たち人間の場合、まずおたがいに名前を知りあってから親しい交際が始まる。しかし、全員が名札をつけたり、背番号を背負されたり、色わけされたりすることになったらたまらない。人間と鳥との関係も同じように考えられよう。むやみに鳥を生け捕りにして標識し、放鳥すればよいというのではなく、鳥に迷惑をかけず、傷つけず、研究の目的に最も適したマーキング法を工夫すべきなのである。

研究者の地道な努力と観察家の協力によって、これまでに野生動物の移動や社会組織、生活史など、生き生きとした姿が明らかにされてきた。そのなかでどのような創意・工夫がなされてきたのか、新たな工夫や着想へのヒントが得られることを祈って、ここに苦心作の一部を公けにしてみよう。

ついでに、以下、他の動物群のマーキング技術について参考書をあげておく：

伊藤嘉昭・村井実(1977)動物生態学研究法、古今書院、特に上巻第Ⅲ章。

Stonehouse, B. (ed.) (1978) Animal Marking: Recognition Marking of Animals in Research. 257 pp.

Southwood, T.R.E. (1978) Ecological Methods. 2nd edn. 特に pp. 70-92. (昆虫について解説)

(長谷川 博)

1. 細くて丈夫なカラーリング

— ビニール被覆銅線の利用

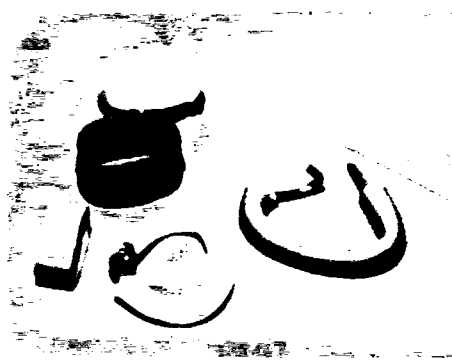
福田道雄

枝や岩などによく足をぶつける鳥や、足の

短い鳥にはビニール被覆銅線製のリングが合っている。これは電気配線用の製品で、色は赤、黒、青、黄、白、緑などがあり、線の太さもそろっている。

足の太さ(周囲)より1.5 cm くらい長めに銅線を切る。両端のビニールだけを約6 mm 切りとり、その銅線裸出部を折返して装着する。太い銅線を使う場合、折返しが難しいので、ビニールの外環を抜きとり、これに適当な太さの銅線を通し直して使う。また一本の線に何色かのビニール環を組合わせて入れてもよい。

銅線が太くなるとリングが変形しないので、踵突起にひっかからないように大きさを十分に吟味すること。特に、雛にバンディングする時に注意。リングの幅は太いものでも2~3 mm 程度なので、多数のリングがつけられ、非常に多くの色組合せが可能である。変色はほとんどない。カワウでは、9年目のものなおこのリングで個体識別できる。



2. 簡単に自作できるカラーリング

福田道雄

塩化ビニール・カラープレイトを使って、カラーリングが簡単に自作できる。塩ビ板は少し大きい文具店あるいは工具店などで市販されている(厚さ1 mm 以上のものは自作が困難)。色は赤、白、黄、青、緑、黒、橙、黄緑、空色などと数も多い。ピンクはすぐ退色して白となるので注意。

まず、リングの大きさと同じ太さの心棒を

作る。リングの幅に合わせて、プレートを細長く切る。これを湯につけて柔らかくした後、心棒に巻きつけ、それを鼠糸か細い針金で固定し、水につけて冷せばでき上りである。1~2回巻けば十分である。バンディング時、硬質ビニール用接着剤をつけるとよい。

色があざやかで、退色がほとんどなく、丈夫(オナガガモで4~5年は脱落しない)が特徴である。接着インキで数字も書ける。ただし、よく枝や岩に足をぶつける鳥では、寒い時などにけ欠ける場合が多い。

3. 羽毛の染色

福田道雄

鳥の体を染色した標識はよく目立ち、足を見るのが難しい場合の多い鳥では有効である。白い羽を持つ鳥では利用範囲が大きい。染色剤には各種あるが、ここでは筆者が調査したピクリン酸について述べる。ピクリン酸はアルコールで溶解して、布などで塗る。鳥を放すのは、アルコールが十分蒸発してからがよい。アルコールは燃料用で十分だが、ピクリン酸は特級の方がいい。

染色後、数日間は蛍光のある黄緑で、その後蛍光がなくなり次第に赤味が増し、1か月くらいでオレンジ色に近くなる。その後はほとんど変色しない。水鳥類では、水につかる部分を中心に割合落ちるので、何度も丁寧に塗ること。粘膜部にはつけないように。

染色標色は、個体識別がほとんどできなく、また換羽によって全く消失する。なお、オナガガモ雄では、胸の白い羽を染色しても、社会行動にはほとんど影響はなかった。

4. 尾羽の一部をカットする — チュウヒ

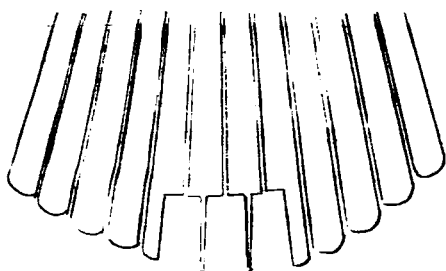
中川富男

現在チュウヒで、標識個体の確認を容易にするため、尾羽の一部をカットする方法を用いている。ヒナの尾羽が10~15 cm(30~35 齢)に伸びた時、尾羽の中央4枚(両端は内側のみ)を先端から5、6 cm の所で羽軸を残してカットする(図)。

野外では、旋回、方向転換等で尾羽を広げた時に容易に確認でき、10 か月を経てもカット時と変わらない状態で観察できている。ワシタカ類や、カラス等で有効と思われる。

注意すべき数点をあげておく。

- 1) 尾羽が伸びている最中にカットするため、羽軸は残す。
- 2) 尾羽中央2枚のみカットでは、尾羽を全開した時しか確認できない。
- 3) 瞬間的に判断するため複雑なカット(個体識別)まで行っていない。
- 4) 自然換羽との識別に注意する。自然換羽では深く、カット個体では浅く見える。



5. 羽軸に異なる色の羽をさし込む法

中村 浩志

風切羽や尾羽の羽軸は、中が空洞になっている。捕獲した鳥のこれらの羽の羽軸をカッターナイフで斜めに切り、中の空洞に異なる色をした羽をさし込むことにより、野外での個体識別の手段として使うことができる。私は、ハシボソガラスを捕獲した折、尾羽の1本にニワトリの白い羽をさし込み、瞬間接着剤アロンアルファでぬけないようにして放鳥し、野外で個体識別している。

ただし、鳥は換羽するので、この方法による識別は長くて1年間しか持たない。色足環などに比べると、染色羽を用いるとか、さし込む位置を違えるとかして、野外でより目立ちやすくすることができるが、あくまで一時的な補助手段である。色足環をつける折、この方法を併用すると便利でしょう。

6. 反射テープの利用 — アオバズク

大庭 照代

アオバズクの各個体は、胸の斑の模様・顔

付き・音声(論文執筆中)が異なるが、昼光・薄明・暗闇を問わず識別するには特別な方法が必要である。入手が楽で安価なことを条件に、反射塗料の利用を考えた。反射塗料は微細なガラス玉を含み、これを単層均一に塗布したときのみ高率な反射が得られる。素人にはこの作業は難しい。そこで、シンロイヒ機技術部の助言を得て、反射テープをアルミニウムの私製足輪(8mm幅)に巻く方法にした。まず足輪を鳥に装着してから、足輪の幅に切りそろえたテープを空気を入れぬように二重に巻き上げた。反射テープは接着後の掻傷等々に強く、小さな傷が拡大することはない。色数は赤黄白緑青の五色あり、昼はもちろん、夜間も強力ライトを使うと50 mの距離で十分に使えた。但し、黄と白、緑と青の反射光は見分けにくかった。有効期間は不明であるが、鳥に装着して1年後でも、また風雨日射にさらしておいて5年後でも、効果に変わりはなかった。

7. 反射テープの利用 — タマシギ

米田 重玄

反射テープを首輪または雨おおいに張りつけ、反射テープの色(白黄赤青緑)および形で個体を識別する。

巣内および巣の周辺での行動観察のために、次の2つの方法を使っている。

- 1) 弱い光源(3Wくらいの電球)を巣から少し離して(5~10m)固定し、ブラインド内においた自動車用バッテリーと接続する。
- 2) 強力ライトのように焦点のある光源を三脚に固定して手許におき、1分間隔で約5秒間巣を照らし、抱卵鳥の有無を確認する。

1)の方法は、巣内外の行動観察はできるが、非常に目が疲れる。2)の方法では巣への出入り以外のデータはほとんどとれない。

8. アカゲラにつけた肩タグ

石田 健

材料は、スコッチ・プラスチックテープ(19mm巾)、ダイモテープ(6mm巾)、

水糸（ナイロン製）と瞬間強力接着剤。水糸は雑貨屋にある。作り方は、まずプラスチックテープとダイモテープを適当な長さ（アカゲラで約3 cm）に切り、接着面同士をはり合わせ角をとる。ふちを瞬間強力接着剤で補強した後、端によせて7 mm位の間隔で小穴を2組4ヶあけ水糸（20 cm位）を2本、たてに通す。装着するときは、水糸を肩にまわして少しゆるめにしぼり、結び目を瞬間強力接着剤で補強した上で余分の糸を切り捨てる。

アカゲラ雄の左肩につけて1年以上たつが、繁殖活動も正常に行ない、飛翔その他の行動に支障は見られない。ダイモテープの色落ちはなくかなりよくみえる。種によって、長さだけでなく幅も調節するとよい。もっと幅広いのテープもある。



9. 番号入り色足環 — アホウドリ

長谷川 博

野外で効率よく個体識別できるなら、観察や研究にはずみがつく。アホウドリは体が大いなので足環を小さくする工夫は不要。だが、3～4才で出生地に帰り、おそらく7～8才で繁殖を始め、その後長く生きる（確認最長は今までのところ20年）から、耐久性のある足環を作ることが何よりも重要。また、海上での標識にも役立つように目立つものを作る必要がある。現在利用しているのは、アメリカAlmac プラスチック社製2層プラスチック板に、3桁のアラビア数字を2か所に彫り、まるめたもの。数字は一通りにしか読めない組合せとする。2か所に彫っているのでどの

方向からでも判読できる。出生年ごとに色を変える。成果は上々で、今後の調査がたのしみである。大形の鳥ならどんな種にも適用できるだろう。どのように見えるかを知りたいなら、拙著「アホウドリ」（平凡社）を参照。加工は永井恒製作所（03-449-7552）に依頼、材料は直接輸入。彫刻のしかたにもよるが加工単価は最低250円とみておくとよからう。

10. ラジオテレメトリー

米田 重玄

小型の部品を使用し、消費電流を減少させることにより（2.5 gの電池を使い全体で4 g弱）、2ヶ月間発信させることのできる送信機を作ることができるようになった。なお受信可能距離は200 m～500 mであった。これで少し大きめの小鳥の行動を追跡できる。作成法や単価、周辺機材については、直接筆者あて連絡をとって下さい（山階鳥類研究所標識研究室）。

11. カワガラスのマーキング

江口 和洋

カワガラスは水中へもぐり、通常近接しての観察が困難で、体色が黒褐色で目立ちにくいといった特徴をもつ。このため、標識としては飛翔時にも確認でき、退色しにくく、脱落しにくいといった条件が必要である。現在までに、1) 1×2 cmの反射テープをテグスで首から下げる、2) 反射テープのスポットを数個頭部に瞬間接着剤でくっつける、3) ペイントマーカーを頭部にぬりたくる、4) Hughes社製のカササギ用足輪を2～3個とりつける、といった4つの方法を試みた。

1)の方法は、よく目立って、飛翔時にも確認できるが、1週間もたない。2)は1)ほど目立たず、1週間もたない。3)も目立つが、1ヶ月以上たつと痕跡のみになり、色の判別ができなくなる。結局、4)の方法が確認に時間を要しても、最も持続性があり実用的である。現在、足輪とペイントマーカーしか使っていない。

12. ガン類のマーキング

呉 地 正 行

標識調査（山階鳥研と共同）の一環として1981年からガン類のマーキングを行っている。標識放鳥したヒシクイとマガンにはすべてプラスチック製の首環と足環をつけている。装着法はハクチョウ類と同様で、足環のつけ方で成鳥と幼鳥を区別できるようにしている。

首環、足環の色はヒシクイが黄色、マガンが青色で、首環には文字と数字で3桁の番号が刻んである。これらの標識は野外でも目立つので、標識鳥はほぼ全数が発見されている。特に黄色の標識はよく目立つ。ピクリン酸（黄色）による下尾筒（白色）染色も試験的に行っている。結果は良好で密集した群れの中でも比較的容易に発見できる。今後は下尾筒と白額部（マガン）の特定の部分（右側または左側など）を染色し、その組合せで個体識別を行うことも検討している。距離があり首環の番号が判読不能の際にはこの方法は有効と思う。テレメトリーの使用も考えており、飼育鳥での実験では良い結果を得ている。これを用いれば標識鳥発見の効率化と夜間、早朝、薄暮時の調査が可能となる。



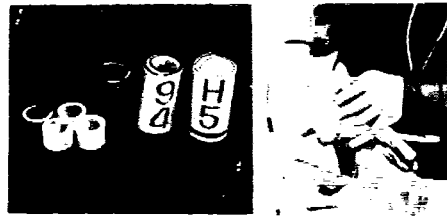
13. ユリカモメへのマーキング

須川 恒・大 槻史郎

京都の鴨川で越冬するユリカモメに1979年よりマーキングを行なっている。最初はハト用やHughes社のカラーリングを2～3個組みあわせて個体識別を行なった。しかしカラーリングの脱落や脱色があり、米国Almac

社のプラスチックシート*で写真のような足環を作って1982年より使用している。プラスチック加工業者にシートの切断と刻印してもらい（1枚20円）、自分で丸めている。装着の際はホカロンであたため、スナップリングプライヤーで広げ、アロン・アルファで補強の接着をしている。環境庁リングの番号の下2桁と対応させてアルファベットや数字を決め、縦に3方向からわかるように刻印している。リングの向きにより読みとりにくい場合もあるが、他地域に飛来した場合の目立ちやすさや得られた情報の確度は高い。調査結果の一部は須川恒（1984）月刊海洋科学16:194-198に、標識鳥の観察依頼文はアニマ（1984）3月号、野鳥（1984）4月号にある。発見された場合はよろしく。

* 最近入手しにくいようだ。



・鳴き声パターンによるカッコウの個体識別

百瀬 浩・中村浩志

捕獲が困難な種や悪影響が心配な種では、外見的特徴等で個体識別するしかないが、鳥で難しい事が多い。私達はカッコウでこの問題に直面し、鳴き声によって個体を識別する事を試みた。私達の調査地には普通にカッコウと鳴く他にカックウ、キャッコウなど聞える鳥がいて容易に識別できた。また録音することによって声の高さ、時間間隔などを分析し、同じように聞える声も個体差があることがわかった。この方法には欠点もあるが、鳥に悪影響を与えないという利点がある。種々の鳥で試していただきたい。

ドナルド・S・ファーナー教授 中村 司

私は、1959年9月からカリフォルニア大学パークレー校の大学院で鳥学などを学ぶ機会を得たが、文部省からさらに半年間の延長が認められたので、ワシントン州立大学のファーナー教授(Prof. Donald S. Farner)のもとで翌年3月まで研究に従事することになった。F教授の動物生理学研究室は、こじんまりして非常に機能的であった。鳥の生理で共に有名なキング助教授(当時)と協同で渡り鳥の体脂肪や内分泌の研究が進行していた。私は特に後者のプログラムに加わり、ミヤマシトドを良く設備された環境飼育室で一定の日照や温度下で処理した後、鳥の視床下部を組織化学的に調べる役割を受け持った。ところが脳の組織を固定する時は、うまく時間を調整しないと昼食をとる暇さえない状態で戸惑ったが、F教授はきびしく指導された。宿舎から研究室に通う毎日、北国の秋の紅葉の美しさを眺めることができた。この滞在中、東大からこられた補原春一博士や西ドイツのオクシェ博士らと研究を共にすることができ有意義であった。

何かの機会で2度ばかりF教授の御宅に招待されたことがあったが、教授はいつも研究の話で持ちきった。またその時、奥様がワシントン州立大でドイツ語を教えておられることを知った。やがて北国の厳しい冬がやってきたが、ホワイトクリスマスの美しい情景も忘れられぬ思い出のひとつまであった。こうして半年間の楽しい研究生活を終え、F教授に惜しまれながら、日本からの要請を優先し3月帰国した。

その後研究を通し、論文交換や文通を続けた。まもなくF教授はワシントン大学へ移られ、キング助教授が教授に昇格された。1969年にF教授と小林英司教授がコンビナーとなって、鳥の内分泌に関する日米科学セミナーが東京で開かれた。外国からの参加者の中にはウォールフソン、キング、アッセンマ

ッシャー、ロフト、オクシェ諸教授の顔が見られた。1974年の国際鳥学会ではカンペラで再会した。F教授は、この年から2年間アメリカ鳥学会(AOU)の会長を務められた。さらに1978年の国際鳥学会ではベルリン大会の委員長になられた。この会では特に「鳥の視床下部」のシンポジウムも主催された。F教授はローレンツ教授やマイヤー教授らと共に全体会で特別講演され、渡りの生理における視床下部の役割を中心に熱っぽく話された。この後、F教授主催のレセプションが開かれ、仲間や弟子たちが集まった。1982年の国際鳥学会はモスクワ大学で行なわれ、学会でお目にかかったが、F教授は当地に何日か前に来ておられたとのことだった。この時、1983年のAOUの百周年大会にできれば出席したいとお答えしたが、果せなかった。この会には黒田会頭が御一人参加されたが、同年は山階鳥類研究所の50周年記念の年であったため、同所研究報告の記念号に特別寄稿を依頼したところ、病のためとうとう間に合わず、次号への寄稿を約束して下さった。間もなく「鳥類生理学における最近の進歩」と題するぼう大な貴重な論文を御送りいただき、15巻2号に掲載された。

現在、Avian Biologyをキング教授と共に編しておられるが、鳥の生理、なかでも渡りの生理では世界の指導者として活躍してこられたF教授の業績を称えとともに、今後ますますご健康で、引続き研究面で各国の後輩をご指導下さいますようお願い申し上げる次第である。

日本鳥学会創立70周年記念出版

現代の鳥類学

会員特価 3,400円(送料不要)

お申し込みは 日本鳥学会へ

鳥学会近畿地区懇談会近況

当懇談会もいよいよ6年目。1982・83年の例会の様子をお知らせします。(なお、いままでの経過は本誌№6・8・11・13をご参照下さい。)

○第14回例会 1982年3月22日

伊丹市労働福祉会館 参加29名
大迫義人：ナベツルの越冬生態

山田信夫：樺太・台湾の鳥について

賀茂川鳥類調査グループ：賀茂川の鳥類

— 都市河川の環境特性と関連させて

○第15回例会 1982年9月25～26日

伊勢湾・神島 参加10名
明石全弘：ホオジロのことば

○第16回例会 1982年12月19日

京都・日本イタリア会館 参加19名
別所伸二：オオミズナギドリの人工孵化・育雛

百瀬浩：ウグイスの歌の構造について

○第17回例会 1983年3月13日

伊丹市労働福祉会館 参加15名

宮沢望：オオジュリンのなわばり活動

伊藤信義：サギ類の就峙前集合について

小泉光弘：トビの空間構造と雛の独立過程

○第18回例会 1983年9月25日

大阪市自然史博物館 参加18名

大迫義人：セグロセキレイのなわばり分布

樋口行雄：火力発電所構内樹林帯における鳥類群集

川村多実二鳥類コレクション見学

○第19回例会 1983年12月18日

京都大学楽友会館 参加13名

別所伸二：オオミズナギドリの人工飼育

須川恒：ユリカモメの越冬地における定着過程

伊藤信義：コサギの冬場に就峙したクロトキの1例。本邦におけるクロトキ生息記録の集計

(上田恵介)

第3回鳥類談話会の報告

1981年に始まった談話会の3回目が、新しくできあがった鋼路市立博物館で2月25、26日に行われた。北海道東部の鳥学会、野鳥の会々員の有志の交流会も定着してきたようで、今回は40名近くが参加した。当初は交流が主な目的であったが、2回目からは研究紹介もつけ加えた。今回の発表は次のとおりである。川辺百樹：セグロセキレイの話題二つ、高田勝：道東の野鳥、芳賀良一：十勝川水系上流の河川性鳥類、藤巻裕蔵：道東におけるホオジロ類の分布、三浦二郎：1983鳥類標識調査結果と考察、知床横断道路鳥類調査。林田恒夫：記念講演、オーストラリアのツル。芳賀良一：日中ツル・シンボジウム報告。

なお、第4回談話会は三浦二郎氏のお世話で、1984年10月養老手温泉につかりながら行われる予定である。(藤巻裕蔵)

Information

「海鳥シンポジウム」の記録まとまる

昨年10月に東大海洋研究所で催されたシンポジウム(「ニュース」№12参照)の記録が、「月刊海洋科学」16巻4号に「海鳥」特集としてまとめられました。海洋出版発行、定価1,500円、電話03-230-1530(代)、〒102 東京都千代田区三番町7-5

Meeting

鳥学会例会 1984年2月18日(土)

東京大学農学部

<講演> 鳥学海外の話題：タイ国の鳥類探訪(森岡弘之氏) アメリカ鳥学会100年記念大会の様子

森岡さんは、主にジャングルの鳥の標本採集を目的に、昨年9～11月のタイを訪れた。

タイの鳥相の生物地理的位置を解説後、バナナからチェンマイまでの数ヶ所でキャンプ

を張り、ジャングルに入って調べた鳥について剥製を見せながら説明された。また9月下旬には日本辺りから渡って行くツバメ、オオルリなどが見られたこと、地元のハンターに弾を1発渡したら地上にいるハッカクと高い木の上にいるヒロハシを1度にとってきた(?!)話など披露された。マメハヤブサ、キヌバネドリ、オオサイチョウなどの異国の鳥の剥製を手にし楽しいふんいきであった。

黒田さんは、昨年9月26～30日にニューヨークのアメリカ自然史博物館で行なわれたアメリカ鳥学会(AOU)の100年記念大会に、日本からはただ一人参加された。

参加者1,150人余、発表は20歳そこそこの人から92歳のデラクール氏まで364題という盛大な大会の様子を、プログラムを示しながら説明。講演の内容を分類すると生態学関係が断然多く、次に生理、音声、行動が続くとのこと。またAOUには学会誌「Auk」の他に1920年から「Auklet」というコミック(パロディ?)・オーニソロジー誌があり、その風刺的論文も紹介された。

最後は、その大会で黒田さんが発表した、太平洋の海洋鳥の分布の中間報告で結ばれた。

(石田 健)

地方鳥類誌リスト作成協力者

前号で掲載しました都道府県別鳥類誌の特集に際しては多くの方々のご協力をいただきました。紙面の都合上遅くなりましたが、本号でご紹介しお礼を申し上げます。なお勝手ながら、リスト中に著・編者または発行者として明記されている場合は省かせていただきました。

清末忠人、黒田隆司、国立科学博物館分館、茂田良光、武石干雄、竹丸勝朗、日本鳥類保護連盟、日本野鳥の会、長谷川博、樋口行雄、北海道自然保護課、堀内盛一、御厨正治、宮城県環境保全課、森岡弘之、山階鳥類研究所(敬称略)

国会図書館への納本のすすめ

今回の地方鳥類誌リスト作成にあたっては、国会図書館の蔵書は調べませんでした。それはかつて別の件で同館を利用した際、関係書がほとんどそろってなかったため、その後多少事情は違っているかもしれませんが、多分前号所収のリストは完成できないと思います。

ところが国会図書館法第25条では、出版物を発行したときは、その発行者は

「文化財の蓄積及びその利用に資するため、発行の日から30日以内に、最良版の完全なもの一部を国会図書館に納入しなければならない」となっていて、同館では出版物を集める義務があります。そのため本ニュースレターですら、3号から送ったところバックナンバーを請求されたくらいです。

現在日本で出版物を完全に保存し利用できる所は同館しかありません(本学会はもちろん、鳥研や野鳥の会、保護連盟などでも送られてきた本や雑誌を全部受けつけてくれる可能性はありません—保管できるスペースがない、整理する人がいない)。発行がずっと以前でもかまいませんので、まだ未納の出版物(地図、映画、レコードなども含む)がありましたら、下記へぜひご寄贈ください。

<納本先および問い合わせ電話>

〒100 東京都千代田区永田町1-10
-1 国立国会図書館収集整理部収集課

<一般納本受入係>

Tel. 03-581-2311・内線409

(川内 博)

例会のお知らせ

本誌を見せて動物園へお入りください

1984年10月27日 (土) 午後2時開演～4時ごろまで

＜鳥類研究におけるマイコンの利用＞

講演：鳥の渡り活動を測定するシステム. 中村司氏(山梨大学). マイコンを使って鳥の声を分析する。高良真一氏(雁を保護する会)

短報(当日も受付けますので、スライドなどご持参下さい)

会場：上野動物園・動物園ホール(東京都台東区上野公園 上野動物園西園 モノレール下)

※ やむをえず講演の変更や中止をする場合があります。参加希望される方は、10月24～27日の昼間、テレフォンスービスをしていますのでご利用下さい。

電話番号 0484-62-7141

＜幹事の分担変更＞

本年4月より本学会幹事の変動がありましたのでお知らせします。

編集：森岡弘之・樋口広芳 庶務：唐沢孝一・吉井正、川内博・長谷川博(ニュース担当) 石田健(会合) 会計：福田道雄・竹下信雄・米田実

＜「現代の鳥類学」売れ行き好調＞

日本鳥学会創立70周年記念の出版「現代の鳥類学」(森岡・中村・樋口編、朝倉書店発行)は売れ行き好調です。会員特価3,400円(送料不要)は9月末日まで。振替用紙で学会事務所まで申し込んで下さい。本は朝倉書店から発送されます。

＜次号予告 特集 調査・観察の小道具＞

会員の方からのアイデア募集の第2弾!

日ごろから鳥の生態・行動・生理などの調査・研究にいそしんでいる会員ならではの創意工夫が、ちょっとした道具になされてはいないでしょうか。

鳥が近くへ寄ってきすぎて、一般の双眼鏡ではピントが合わない場合はとか、観察用具の出入れの便利なザックはとか、ちょっとした改造で便利になるカメラなど、実際に使っているものを400字(20×20)程度でご紹介ください。写真・図なども加えて結構です。

＜締切り 9月末日＞ 送り先〒112 文京区大塚5-40-10 日本大学豊山高校

川内 博 宛

編集後記

数年前、上野の不忍池で初めてキムネオナガガモを見たときには、正直いって一瞬びっくりした記憶があります。研究者としては、より正確に、より確実にという気持ちが先立つものですが、やはり一般感情としては決して喜ばれるものでないことは充分心得ておく必要があると思います—マーキングの工夫—鳥学会ならではの企画と自負しております。ご執筆者にお礼申し上げます。(川内)

鳥学ニュース No.14

1984年6月5日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内 (電話) 03(364)2311 (振替) 東京1-6599

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博

印刷所 文英社印刷